

学位論文審査の要旨

学位申請者	佐藤 香寿実 ジェンダー学際研究専攻 2015年度生		論文題目	「承認のライシテ」とムスリムのための場所づくり —フランス、ストラスブールにおけるモスク、墓地、宗教間対話—	
審査委員	主 査:	熊谷 圭知 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 :	否
	副 査:	小林 誠 教授		「否」の場合の理由	
	副 査:	水野 勲 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む	
	審査委員:	倉光ミナ子 助教		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある	
	審査委員:	伊達 聖伸 准教授 (東京大学)		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている	
学位名称	博士 (社会科学)	(Ph. D. in Human Geography and Area Studies)		<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている	
				<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている	
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について	

学位論文審査・内容の要旨

移民の受け入れへの反発と排他的なナショナリズムがヨーロッパ諸国を覆っている。こうした中で、本論文は、フランスの政教分離原則(ライシテ)とムスリム移民との間のコンフリクトに焦点を当て、その解決の方向性を、ライシテの多様な実践の可能性に探ろうとした研究である。筆者は、アルザス地方の中心地ストラスブールにおけるコンコルダート体制に基づく宗教と政治の協調関係を、「承認のライシテ」として読み解き、現地での長期のフィールドワークに基づきながら、その実現に必要な条件や課題を明らかにすることを試みている。研究手法は、(1)文献研究、(2)現地での資料収集と分析、(3)質問紙を用いた半構造化インタビュー調査、(4)参与観察、である。論文の構成は、1章で研究の目的・方法、2章で研究の枠組み、3章でフランスにおけるムスリムの統合、4章でストラスブールの地域特性が論じられた後、本論文の核をなす、具体的な研究事例、1)ストラスブール大モスク(4章)、2)ムスリム公共墓地(5章)、3)宗教間対話(6章)、が提示される。最後に、「承認のライシテ」の可能性と課題(8章)、結論(9章)で締めくくられる。研究枠組みとしては、ライシテ論と人文地理学の場所論が用いられている。

ストラスブール大モスクは、ライシテの原則とは異なり、公的支援を得て建設されたモスクである。その過程では、このモスクの表象として、ローカル(ストラスブール)、ナショナル(フランス)、超国家(ヨーロッパ)といった様々なスケールが、ムスリム団体および市当局によって用いられている。それはいずれも、このモスクが「よそのもの」ではなく、「ここ」に帰属するものであることを主張するものだった。ムスリム公共墓地は、埋葬の慣習が異なるムスリムの要求を包摂するために、ムスリム団体と協議の上で工夫されて作られた。それはムスリムに、フランス市民としての権利を与えるものであり、墓をめぐる習慣の変化には統合の兆しも見いだされる。宗教間対話においては、異なる宗教が共存し、対話、交流を可能にする機会として、宗教カレンダーの発行、宗教間の庭の建設、宗教音楽コンサートが市と市民団体の主導で行われ、成果を挙げている。

こうした事例をふまえて筆者は、次のように結論する。1) ストラスブールでこのような実践が可能となった背景には、①アルザスモーゼル地方のコンコルダート体制(制度的要因)、②90年代以降の市政の姿勢(政治的要因)、③フランスのライシテ・共和国的価値観のポジティブな影響(文化的要因)、④EUの中心であるストラスブールという国際都市の流動性(地理的要因)、が存在する。2) ストラスブールモデルのライシテには、ムスリムというカテゴリーの均質化と、行政当局による選別と管理をもたらすという課題がある。しかし、3)「今、ここにいる」存在としてムスリムを可視化し、包摂する成果をもたらしていることは、「承認のライシテ」と呼ぶにふさわしいものとして評価できる。4) そこには「ともに投げ込まれている」空間の中で、相互交渉を繰り返していくという「場所」の特質が反映されている。そこから筆者が到達するのは、上からのナショナルで均質的な普遍主義ではなく、それぞれのローカルな場所に根差した相互作用の実践から紡ぎだされるような下からのオルタナティブな「普遍」の在り方である。ライシテをめぐる文献検討・理論的考察と、ストラスブールという現実の場所のフィールドワークに根差した考察を交差させ、グローバル化の中の喫緊の課題に迫った、稀有な研究であり、博士(社会科学)、Ph. D. in Human Geography and Area Studies にふさわしい論文として高く評価できる。